

近世日本の鉄砲

16 世紀後半、日本では軍事的な対立が激化した。足利幕府（1336-1573）が崩壊し、各地の大名が領土をめぐって争っていた。このように多くの勢力争いがあったことは、新しい武器が普及するための絶好の環境であった。1540 年代にヨーロッパから伝わった火縄銃は、戦法に大きな転換をもたらした。

その後、銃器の国産化が進んだ。日本の鍛冶職人は、ヨーロッパの火器を再現し、独自の改良を加えていった。やがて、日本の鍛冶職人は、火縄銃（別名アークウィバス）を数千丁単位で生産するようになった。その後、西洋で新しい銃器が普及しても、火縄銃は 3 世紀以上にわたって主流であった。

鉄砲は、九州の南に位置し、古くから貿易商や密輸業者の中継地であった種子島を経由して日本に入ってきた。17 世紀初頭に完成した『鉄炮記』にその様子が描かれている。1543 年、ポルトガルの冒険家たちが乗った船が、嵐の中、種子島に避難してきた。ポルトガル人たちは、島の領主である時堯（1528-1579）に謁見し、持参した火縄銃の使い方を披露した。時堯は直ちにそのうちの 2 丁を購入し、地元の刀工、八板金兵衛（1502-1570）にその複製を命じた。八板は日本初の鉄砲鍛冶となり、種子島は"火縄銃"の通称となった。

鉄砲は、徳川幕府（1603-1867）の天下統一のための戦いで重要な役割を果たした。徳川幕府のもとで、内戦は終わり、旅行や貿易に厳しい制限が設けられた。幕府はまた、銃器などの武器の製造と所持に厳しい制限を課した。

鉄砲鍛冶は幕府に武器を供給し続けたが、日本は火縄銃、雷管式、連発式弾倉など、西洋の銃器に革命をもたらした革新的な技術を開発することはなかった。その代わりに、日本の鉄砲鍛冶は前装式の火縄銃の設計を改良し続け、1854 年に開国するまで、このタイプの銃器が唯一の銃器であった。